

【特集】新学習指導要領と「大学入学共通テスト」へ向けて

新学習指導要領「外国語」の要点

1. 小中高「外国語」共通の改訂ポイント

- 外国語科の目標において「資質・能力の3つの柱」を明確化。

〈知識及び技能〉

音声、文字、語彙、表現、文構造、言語の働きなどの知識の理解とコミュニケーションにおける活用

〈思考力、判断力、表現力等〉

コミュニケーションを行う目的、場面、状況などに応じて自分の考えや気持ちなどを伝え合う力

〈学びに向かう力、人間性等〉

外国語やその背景にある文化に対する理解を深め、他者に配慮しながら主体的にコミュニケーションを図ろうとする態度

- 学校段階間の学びを接続するため、何ができるようになるかという観点から、小中高を通した5つの領域別の目標や言語活動等を明記。

〈4技能5領域〉

聞くこと 読むこと
話すこと(やりとり) 話すこと(発表)
書くこと

2. 小学校の改訂ポイント

a. カリキュラム

	改訂	現行
3年 4年	活動型 外国語活動 ・2技能3領域 ・年間35単位時間	なし
5年 6年	教科型 外国語 ・4技能5領域 ・年間70単位時間	活動型 外国語活動 ・2技能 ・年間35単位時間
計	210単位時間	70単位時間

※1単位時間：45分(授業は年間35週)

b. 目標

外国語活動

外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、外国語による聞くこと、話すことの言語活動を通して、**コミュニケーションを図る素地となる資質・能力**を次のとおり育成することを目指す。

- 外国語を通して、言語や文化について体験的に理解を深め、日本語と外国語との音声の違い等に気付くとともに、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しむようにする。
- 身近で簡単な事柄について、外国語で聞いたり話したりして自分の考えや気持ちなどを伝え合う力の素地を養う。
- 外国語を通して、言語やその背景にある文化に対する理解を深め、相手に配慮しながら、主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度を養う。

外国語

外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、外国語による聞くこと、読むこと、話すこと、書くことの言語活動を通して、**コミュニケーションを図る基礎となる資質・能力**を次のとおり育成することを目指す。

- 外国語の音声や文字、語彙、表現、文構造、言語の働きなどについて、日本語と外国語との違いに気づき、これらの知識を理解するとともに、読むこと、書くことに慣れ親しみ、聞くこと、読むこと、話すこと、書くことによる実際のコミュニケーションにおいて活用できる基礎的な技能を身に付けるようにする。
- コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、身近で簡単な事柄について、聞いたり話したりするとともに、音声

で十分に慣れ親しんだ外国語の語彙や基本的な表現を推測しながら読んだり、語順を意識しながら書いたりして、自分の考えや気持ちなどを伝え合うことができる基礎的な力を養う。

- (3) 外国語の背景にある文化に対する理解を深め、他者に配慮しながら、主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度を養う。

c. 内 容

外国語活動

〈知識及び技能〉

外国語に対する体験的な理解を深めることを重視(コミュニケーションの楽しさや大切さ、日本と外国の言語・文化など)。

〈思考力、判断力、表現力等〉

具体的な課題等を設定し、コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、情報や考えなどを表現することを通して指導(Q&A, Show & Tell など)。

外国語

〈知識及び技能〉

現行の中学校の言語材料のうち、基本的なものを小学校に移行。

音声：発音、音の変化、強勢、イントネーション、区切り

文字及び符号：活字体(大文字・小文字)、終止符・疑問符・コンマなど

語彙：600～700語程度(外国語活動を含む)。

活用頻度の高い基本的な連語・慣用表現。

文構造：単文(平叙文、命令文、be動詞・助動詞・疑問詞で始まる疑問文)、基本的な代名詞、基本的で活用頻度の高い動名詞や過去形、SV, SVC(V=be動詞のみ)、SVO(O=名詞・代名詞)

〈思考力、判断力、表現力等〉

具体的な課題等を設定し、コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、情報を整理しながら考えなどを形成し、これらを表現することを通して指導(外国語活動に対し、「読むこと」「書くこと」を追加)。

d. 内容の取扱い

- ・英語の履修が原則。

- ・モジュール学習(10～15分程度の短時間学習)、60分授業、学習形態(ペア・ワーク、グループ・ワーク)、ICTの活用等に言及。

3. 中学校の改訂ポイント

a. カリキュラム

	改訂	現行
1年	外国語 ・4技能5領域 ・年間140単位時間	外国語 ・4技能 ・年間140単位時間
2年	外国語 ・4技能5領域 ・年間140単位時間	外国語 ・4技能 ・年間140単位時間
3年	外国語 ・4技能5領域 ・年間140単位時間	外国語 ・4技能 ・年間140単位時間
計	420単位時間	420単位時間

※1単位時間：50分(授業は年間35週)

b. 目 標

外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、外国語による聞くこと、読むこと、話すこと、書くことの言語活動を通して、簡単な情報や考えなどを理解したり表現したり伝え合ったりするコミュニケーションを図る資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

- (1) 外国語の音声や語彙、表現、文法、言語の働きなどを理解するとともに、これらの知識を、聞くこと、読むこと、話すこと、書くことによる実際のコミュニケーションにおいて活用できる技能を身に付けるようにする。
- (2) コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、日常的な話題や社会的な話題について、外国語で簡単な情報や考えなどを理解したり、これらを活用して表現したり伝え合ったりすることができる力を養う。
- (3) 外国語の背景にある文化に対する理解を深め、聞き手、読み手、話し手、書き手に配慮しながら、主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度を養う。

c. 内 容

〈知識及び技能〉

言語材料と言語活動を効果的に関連付け、実際

のコミュニケーションにおいて活用できる技能を身に付ける。また、小学校の学習指導要領に示された言語材料も扱う。

音声：発音、音の変化、強勢、イントネーション、区切り

符号：感嘆符・引用符など

語彙：小学校で学習した語+1600～1800語程度。活用頻度の高い連語・慣用表現。

文構造：重文・複文、助動詞や疑問詞(which, whose)で始まる疑問文, or を含む疑問文, 基本的な感嘆文, SV, SVC(V=be 動詞以外), SVO(O=動名詞, to 不定詞, how など+to 不定詞, 節), SVO₁O₂(O₂=名詞・代名詞, how など+to 不定詞, 節), SVOC(C=名詞, 形容詞, 原形不定詞), There+be 動詞+~, It+be 動詞+~(for ~)+to 不定詞, 主語+tell, want など+目的語+to 不定詞, 主語+be 動詞+形容詞+that 節

文法：代名詞(人称・指示, 疑問, 数量), 関係代名詞(主格の that, which, who, 目的格の that, which の制限用法), 接続詞, 助動詞, 前置詞, 動詞の時制及び相など(現在形, 過去形, 現在/過去進行形, 現在完了形, 現在完了進行形, 未来表現), 比較表現(形容詞・副詞), to 不定詞, 動名詞, 分詞(形容詞的用法), 受け身, 基本的な仮定法

※用語や用法の区別などの指導が中心とならないように配慮。

〈思考力, 判断力, 表現力等〉

- ・具体的な課題等を設定し, コミュニケーションを行う目的や場面, 状況などに応じて, 情報を整理しながら考えなどを形成し, これらを論理的に表現することを通して指導。
- ・小学校の学習指導要領に示された言語材料の定着も図る。
- ・言語の使用場面の例に, 「手紙や電子メールのやり取りなど」が追加。
- ・言語の働きの例に, 「事実・情報を伝える」「歓迎する」「仮定する」「命令する」が追加。

d. 内容の取扱い

- ・英語の履修が原則。
- ・「知識及び技能」を実際のコミュニケーションにおいて活用する学習の充実を図る。

・授業は英語で行うことが基本。

- ・言語材料に関し, 受容するものと発信するものの区別に留意。
- ・学習形態(ペア・ワーク, グループ・ワーク), ICT の活用等に言及。
- ・目標と内容との関係について, 教材の中で明確に示す。

4. 高等学校の改訂ポイント

- ・4技能重視の方向性は継続。その上で, 小中と同様, 「話すこと」を「やり取り」と「発表」に分け, 4技能5領域として目標を設定。中学同様, 授業は英語で展開することが基本。
- ・学習目標・内容における小中高の連続性を明示, 5つの領域別の言語活動及び複数の領域を結びつけた統合的な言語活動を通して指導すること。

a. カリキュラム

英語コミュニケーションⅠⅡⅢ

現行「コミュニケーション英語」の後継。4技能バランス型で, 特に「話すこと」を重視。

論理・表現ⅠⅡⅢ

現行「英語表現」の後継。発信力養成型で, ディスカッションやディベートなどの活動実践。

現行
コミュニケーション英語基礎 (2)
コミュニケーション英語Ⅰ (3)
コミュニケーション英語Ⅱ (4)
コミュニケーション英語Ⅲ (4)
英語表現Ⅰ (2)
英語表現Ⅱ (4)
英語会話 (2)

※コミュニケーション英語基礎と英語会話は, 新課程では廃止。

改訂
英語コミュニケーションⅠ (3)
英語コミュニケーションⅡ (4)
英語コミュニケーションⅢ (4)
論理・表現Ⅰ (2)
論理・表現Ⅱ (2)
論理・表現Ⅲ (2)

※必履修は英語コミュニケーションⅠ(2単位まで減可)。いずれの科目も原則, ⅠⅡⅢの順に履修。

各段階		改訂	現行
小学校	外国語(外国語活動を含む)	600～700語程度	—
中学校	外国語	1600～1800語程度	1200語程度
高校	英語コミュニケーションⅠ	400～600語程度	400語程度
	英語コミュニケーションⅡ	700～950語程度	700語程度
	英語コミュニケーションⅢ	700～950語程度	700語程度
合計		4000～5000語程度	3000語程度

b. 目 標

外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、外国語による聞くこと、読むこと、話すこと、書くことの言語活動及びこれら結び付けた統合的な言語活動を通して、情報や考えなどを的確に理解したり適切に表現したり伝え合ったりするコミュニケーションを図る資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

- (1) 外国語の音声や語彙、表現、文法、言語の働きなどの理解を深めるとともに、これらの知識を、聞くこと、読むこと、話すこと、書くことによる実際のコミュニケーションにおいて、目的や場面、状況などに応じて適切に活用できる技能を身に付けるようにする。
- (2) コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、日常的な話題や社会的な話題について、外国語で情報や考えなどの概要や要点、詳細、話し手や書き手の意図などを的確に理解したり、これらを活用して適切に表現したり伝え合ったりすることができる力を養う。
- (3) 外国語の背景にある文化に対する理解を深め、聞き手、読み手、話し手、書き手に配慮しながら、主体的、自律的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態

度を養う。

c. 語彙指導

高校での新語数は現行の1800程度から1800～2500程度(語彙数は状況に応じて各学校で決定)に増加。小学校高学年での教科化も伴い、小中高を合わせた語彙数は現行の3000程度から4000～5000程度に大幅増。

d. 文法指導

知識習得型(文脈をもたない単文単位での学習)ではなく、コミュニケーション活用型(言語の使用場面や働きに配慮した題材を通じた学習)を求める。

〈関連箇所〉

- ・言語材料と言語活動とを効果的に関連付け、実際のコミュニケーションにおいて活用できる技能を身に付けるよう指導。(第2款第12の(1))
- ・意味のある文脈でのコミュニケーションの中で繰り返し触れることを通して活用。(第2款第12の(1)のエ)
- ・単に英語を日本語に、又は日本語を英語に置き換えるような指導とならないよう、言語材料については、意味のある文脈でのコミュニケーションの中で繰り返し触れる。(第3款2の(1))
- ・文法はコミュニケーションを支えるものであることを踏まえ、過度に文法的な正しさのみを強調したり、用語や用法の区別などの指導が中心とならないよう配慮。(第3款2の(3))

第2款 第1～3

英語コミュニケーション

1. 目標

4技能5領域をバランスよく扱い、日常的・社会的な話題について、読み書きや聞き取り、伝達ができるようになる。

I：多くの支援を活用すれば、必要な情報を聞き取り、展開や話し手・書き手の意図を把握し、基本的な語句や文を用いて、情報や考え、気持ちなどを論理性に注意して話したり文章を書いたりして伝えることができるようになる。

II：一定の支援を活用すれば、必要な情報を聞き取り、展開や話し手・書き手の意図を把握し、多様な語句や文を用いて、情報や考え、気持ちなどを論理性に注意して詳しく話したり文章を書いたりして伝えることができるようになる。

III：支援をほとんど活用しなくても、展開や話し手・書き手の意図を把握し、情報や考え、気持ちなどを論理的に詳しく話したり文章を書いたりして伝えることができるようになる。

※支援：速度調整、基本語句・文での言い換え、補足説明、準備時間の確保など。

2. 内容

〈知識及び技能〉

音声：強勢、イントネーション、区切り

句読法：コンマ、コロ、セミコロ、ダッシュ

語彙：英語コミュニケーションIで小中学校+400～600語程度、IIⅢでそれぞれ700～950語程度、小中高で計4000～5000語程度(現行では中高で3000語程度)。

文法：必履修である英語コミュニケーションIの中で、指導要領の「文法事項」に挙げられている不定詞、関係代名詞、関係副詞、接続詞、助動詞、前置詞、動詞の時制及び相など、仮定法等のすべての事項、意味のある文脈でのコミュニケーションの中で繰り返し触れることを通して活用。

〈思考力、判断力、表現力等〉

・具体的な課題等を設定し、コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、情報を整理しながら考えなどを形成し、これらを論理的に適切な英語で表現する。

・5つの領域別の言語活動及び複数の領域を結び

付けた統合的な言語活動を通して指導。

3. 内容の取扱い

・中学校における総合的な指導を踏まえる。

・中学校における学習との接続に留意。特に英語コミュニケーションIの初期段階においては、中学校における基礎的な学習内容を整理したりして指導し、定着を図るよう配慮。

第2款 第4～6

論理・表現

1. 目標

発信力(2技能3領域)の育成強化を目指し、日常的・社会的な話題について、意見や解決策を伝え合ったり、立場や状況が異なる相手と交渉したりすることができるようになる。

I：多くの支援を活用すれば、基本的な語句や文を用いて、意見を伝え合うことができるようになる。

II：一定の支援を活用すれば、立場や状況が異なる相手と交渉できるようになる。

III：支援をほとんど活用しなくても、複数の資料を活用し、多様な語句や文を用いて意見や解決策を論理的に詳しく伝え合うことができるようになる。

※支援：使用する語句や文、補足説明(進め方、発話・文章例)、準備時間の確保など。

2. 内容

〈知識及び技能〉

語彙・文法事項：3つの領域別の目標を達成するのにふさわしいものを適宜取り扱う。また、それらと言語活動とを効果的に関連付け、実際のコミュニケーションにおいて活用できる技能を身に付けることができるよう指導する。

論理展開・表現：

・目的や場面、状況などに応じた論理の構成や展開
・情報や考えなどを効果的に伝える表現

〈思考力、判断力、表現力等〉

・具体的な課題等を設定し、コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、情報を整理しながら考えなどを形成し、これらを論理的に適切な英語で表現する。

・3つの領域別の言語活動及び複数の領域を結び付けた統合的な言語活動を通して指導する。

- ・情報や考え、気持ちなどを適切な理由や根拠とともに話して伝えたり、段落を書いて伝えたりする活動。また、発表した内容について、あるいは書いた内容を読んで、質疑応答をしたり、意見や感想を伝え合ったりする活動。
- ・段階的な手順を踏みながら、意見や主張などを適切な理由や根拠とともに伝える短いスピーチやプレゼンテーションをする活動。また、発表した内容について、質疑応答をしたり、意見や感想を伝え合ったりする活動。
- ・優れている点や改善すべき点を話して伝え合ったり、意見や主張などを適切な理由や根拠とともに伝え合うディベートやディスカッションをする活動。また、やり取りした内容を踏まえて、自分自身の考えなどを整理して発表したり、文章を書いたりする活動。
- ・発想から推敲まで段階的な手順を踏みながら、意見や主張などを適切な理由や根拠とともに段落を書いて伝える活動。また、書いた内容を読み合い、質疑応答をしたり、意見や感想を伝え合ったりする活動。

※スピーチ、プレゼンテーション、ディスカッション、ディベート、ライティングなど。

3. 内容の取扱い

- ・話したり書いたりする言語活動を中心に、情報や考えなどを表現したり伝え合ったりする能力の向上を図るように指導。

第3款

英語に関する各科目にわたる指導計画の作成と内容の取扱い

- ・小中における指導との接続に留意。言語活動を行う際は、既習の語句や文構造、文法事項などの学習内容を繰り返し指導し定着を図る。授業は英語で行うことが基本。
- ・生徒の主体的・対話的で深い学びの実現を図るようにすること。また、実際のコミュニケーションにおいて活用する学習の充実を図ること。
- ・年次ごと及び科目ごとの目標を適切に定め、学校が定める卒業までの指導計画を通して十分に段階を踏みながら、外国語科の目標の実現を図るようにすること。
- ・他者とコミュニケーションを行うことに課題があ

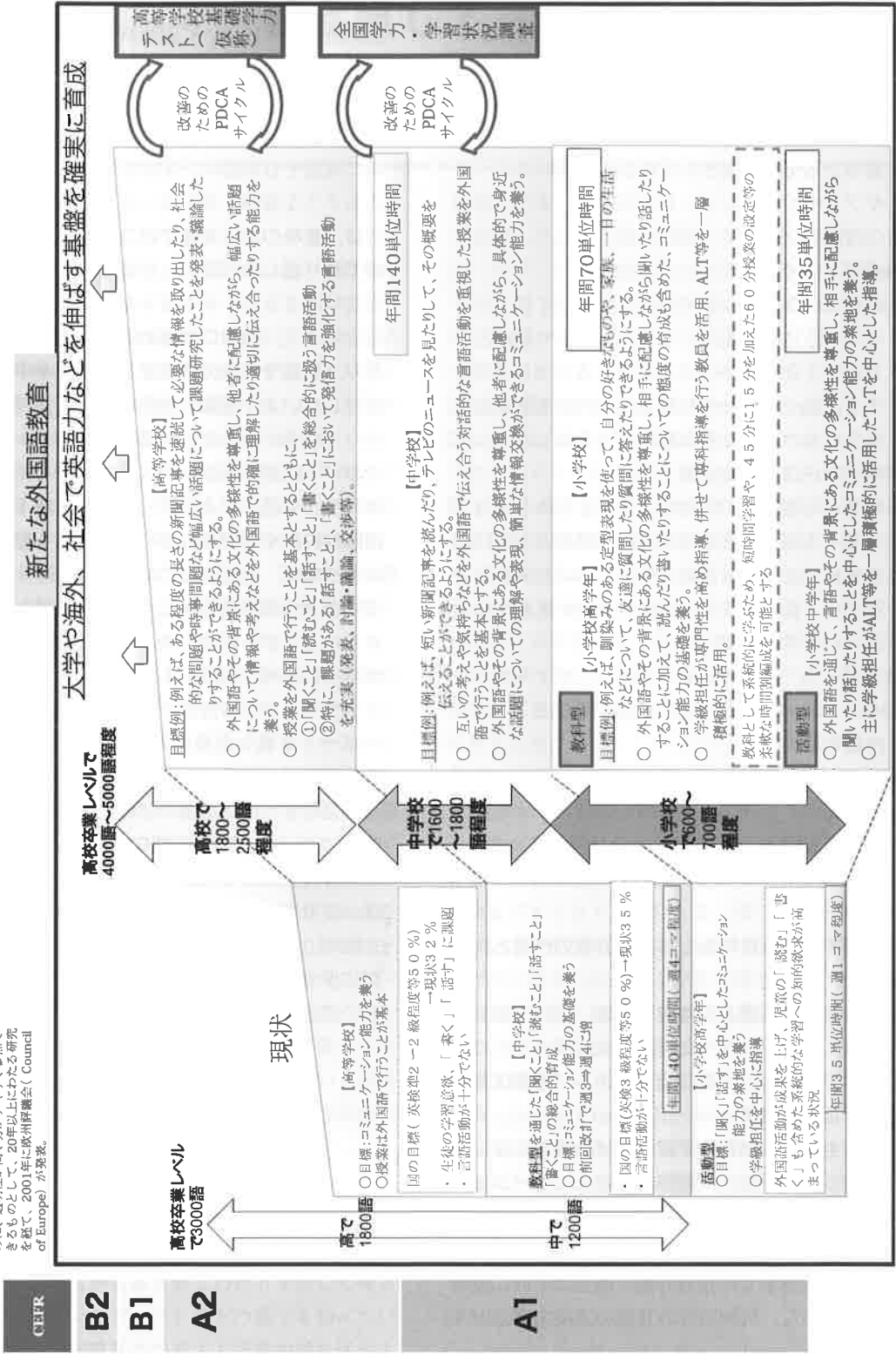
る生徒については、個々の生徒の特性に応じて指導内容や指導方法を工夫すること。

- ・言語活動などにおいて**国語科と連携**を図る。言語活動で扱う題材は国語科や地理歴史科、理科など、**他の教科等で学習した内容と関連付ける**などの工夫をする。
- ・単に英語を日本語に、又は日本語を英語に置き換えるような指導とならないよう、**言語材料については、意味のある文脈でのコミュニケーションの中で繰り返し触れる**ことを通して指導。
- ・文法はコミュニケーションを支えるものであることを踏まえ、**過度に文法的な正しさのみを強調したり、用語や用法の区別などの指導が中心となったりしないよう配慮**。使用場面や伝達内容と関連付けて整理するなど、実際のコミュニケーションにおいて活用できるように、効果的な指導を工夫。
- ・標準的な英語によること。ただし、**様々な英語が国際的に広く使用されている実態にも配慮**。
- ・目的や場面、状況などに応じたやり取りや発表、文章などの具体例を示した上で、生徒がそれらを参考にしながら自分で表現できるよう留意。
- ・英語への興味づけ(映像やパソコン、情報通信ネットワークなどの活用)や英語による情報発信(キーボードを使った英文入力など)の活動への取り組みの推奨。
- ・各科目の5つの領域別の目標と2に示す内容との関係について、単元など内容や時間のまとまりごとに各教材の中で明確に示すとともに、実際の言語の使用場面や言語の働きに十分に配慮した題材を取り上げること。その際、各科目の内容に示す文法事項などを中心とした構成とならないように十分に留意。

(数研出版 編集部)

◎外国語教育の抜本的強化のイメージ

※CEFRとは、シラバスやカリキュラムの
 引きの作成、学習指導要領の編纂のた
 めに、透明性が著しく分かりやすく参照で
 きるものとして、20年以上にわたる研究
 を経て、2001年に欧州評議会(Council
 of Europe)が発表。



※中央教育審議会 H28.12.21「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について(答申)」より